

# 共有規範不在の意識化が社会的迷惑認知に与える効果

青木 香保里

## 【本研究の目的】

バスや電車などの公共交通機関を利用した際、マナーや思いやりのない行動をする他者に遭遇しイライラした経験はないだろうか。自己の欲求充足を第一として他者に不快感を生起させる行為は「社会的迷惑行為」と呼ばれる。1990年代から、こうした行為の増加が問題視され、学術分野・民間企業問わず、社会的迷惑の抑制に向けた取り組みが多々行われてきた。迷惑抑制の取り組みは、公共の場でのポスター掲示やアナウンスといったものから、マナー啓発を行うオンラインサイトや学校教育など幅広く行われている。しかし、こうした多くの対策にも関わらず、現在でも社会的迷惑が抑制・解消されたとは言い難い。こうした状況を生み出す原因として、(1) 社会的迷惑には認知が大きく影響を与えているにも関わらず、社会的迷惑抑制の段階ではその影響が無視されてきたこと、(2) 迷惑認知の判断基準となる規範が社会で共有されていない場合があること、(3) 望ましくない記述的規範が蔓延している場合に適切な対策が取られていないこと、の3点が挙げられる。

本研究では上記3点のうち(1)と(2)に着目し、社会的迷惑の認知者と行為者が互いに異なる規範を持つ時の迷惑認知の検討を行うことを目的とした。先行研究からは、認知者が行為者の注目する規範と同じ規範に注目することで迷惑認知が低下することが明らかにされている(高木・村田, 2005)。しかし、認知者が行為者と同じ規範に注目するには、それ以前に「認知者が行為者と異なる規範に注目している可能性」自体に意識的になる必要がある。そのことに意識的でなければ、自分の注目している規範を絶対視してしまうと思われ、それを脇に置いて相手の注目する規範に目を向けることは難しいと思われるためである。また、周囲が介入する場合にも、他者が注目する規範を逐次指摘することは不可能であり、汎用性に欠ける。以上から、社会的迷惑の抑制には絶対的な規範を前提とせず、認知的側面にも目を向けた対策の検討が必要であり、両者を考慮した対策として共有規範不在の意識化が重要な役割を果たす可能性が考えられた。そこで本研究では「認知者が行為者と規範を共有していない可能性を意識化すること(共有規範不在の意識化)」が行為に対する迷惑認知と行為者への印象評価に与える効果を検討した。

## 【研究1】

研究1では、行為者の見かけ上の人種によって喚起される共有規範不在の意識が行為に対する迷惑認知と行為者への印象評価に与える影響を検証した。本研究は実験操作を含むWeb調査により行った。参加者は迷惑行為が行われる場面のシナリオを読み、その場面に遭遇したことを想像し、その時に感じる迷惑認知と印象評価を回答した。行為者の見かけ上の人種の操作(以降、人種操作とする)には人種を特に記載せず「人」とする条件と「外国人」と記載する条件を設けた。また、シナリオ中の迷惑行為には電車内で席を詰めない、大声で会話をする、飲食をする、通話をする、化粧をするの5場面を用いた。

その結果、人種操作は共有規範不在の意識を喚起しておらず、また迷惑認知に影響を与えていなかった。人種操作は印象評価に有意な影響を与えており、外国人条件の方が日本人条件よりも高い印象評価を得ていたが、共有規範不在の意識による媒介は認められなかった。このような結

果となった原因として、実験操作が不十分であったことが指摘された。迷惑認知と印象評価の関係については、両者は負の相関を示し、印象評価の方が迷惑認知よりも人種操作と共有規範不在の意識化による影響を受けることが示された。しかし、迷惑認知と印象評価の値自体が適切に測定されていなかった可能性があったため、これについても再検討が必要とされた。

### 【研究 2】

研究 2 では、研究 1 の問題を改善した実験操作を行った。具体的には、研究 1 では共有規範不在の意識化を個人に委ね、人種操作により喚起された共有規範不在の意識化の程度を測定していたが、研究 2 ではシナリオ文中に「行為者が規範を共有していそうかどうか」の記述を加えることで、直接的に共有規範不在の意識化操作を行った（以降、これを規範共有の操作とする）。さらにシナリオの具体性を上げ、シナリオ文に視覚的な工夫を加えた。その上で人種（日本人 / アジア風外国人）と規範共有（あり / なし）それぞれが迷惑認知と印象評価に与える影響を検証した。なお、研究 2 では研究 1 で用いた迷惑行為のうち通話場面と化粧場面を採用した。

その結果、外国人条件の方が日本人条件よりも、規範共有なし条件の方が規範共有あり条件よりも、迷惑認知が低く印象評価が高いことが示された。また迷惑認知と印象評価の関係性については、研究 1 と同様に負の相関が見られたものの、人種と規範共有の操作が与える影響は、研究 1 と異なり同程度の影響であることが示された。

### 【研究 3】

研究 2 では、規範共有がある場合とない場合を比較し、規範共有を意識している時の迷惑認知と印象評価に与える効果を明らかにすることができた。しかし、研究 2 では規範共有について意識していない場合と比較した時の「意識化」の効果は明らかにされていなかった。そこで、研究 3 では、研究 2 の実験操作に「規範共有について言及しない」という統制条件を追加し、人種（日本人 / アジア風外国人）と規範共有（あり / なし / 統制）が迷惑認知と印象評価に与える影響を検討することで、共有規範不在の「意識化」の効果を検証した。なお、研究 3 で用いた迷惑行為は、研究 2 と同様に通話場面と化粧場面であった。

その結果、人種と規範共有の操作はそれぞれ迷惑認知と印象評価に影響を与えており、研究 2 と重複する部分では、研究 2 と同様の結果が見られた。また、共有規範があることの意識化は人種操作に関わらず、迷惑認知を上昇させ印象評価を低下させることが示された。その一方で、共有規範不在の意識化は、通話場面では迷惑認知を低下させ印象評価を上昇させており、化粧場面ではかえって迷惑認知を上昇させていた。このことから、共有規範不在の意識化は、迷惑認知と印象評価に影響を与えるものの、その効果は迷惑行為によって異なることが示された。

### 【総合考察】

3 つの研究結果から、共有規範不在の意識化は迷惑認知と印象評価に影響を与えることが示された。ただし、その効果は迷惑行為により異なる可能性も示された。また、共有規範があること意識化は迷惑認知を上昇させ印象評価を低下させることが示された。今後は共有規範不在の意識化効果をより詳細に検討すること、その効果を用いた具体的な迷惑抑制策を検討していくことが必要である。（社会心理学）